



森田 則子

一、小中学生の健康を、増進しよう 心のバリアフリーを

小中学校の健康づくり



問 バス通学などによる体力低下が心配されるがそのための体力向上の取り組みはしているのか。

答 体育科教諭の専科分配を受け、小中9年間の系統的な体力づくりに取り組んでいる。

問 「ゲーム障害」との病名が発表されるほど、スマホ・ゲームによる運動不足も懸念される。「遊びの丘」を活用し、遊び場も含め、体力増進に活用してはどうか。

答 現在、小学校のマラソン大会のコースに活用している。その他にも活用できるように、学校とともに進めたい。

問 公共施設での、駐車スペース、点字・手話案内など、障がい者等に対する合理的配慮は具体的にどうなっているのか。

答 現行規制でのこれ以上の対策は、難しい。

問 大阪府は、がん死亡率が高いことから「がん対策基金」を設立。そのによるがん教育も、推進している。基金を利用し

イベント等での開催も含め「がん教育」を実施してはどうか。

答 薬物乱用、喫煙防止等の保健指導のカリキュラムの中で、がんについて学んでいるが、様々な形で専門の講師によるがん教育も検討したい。

問 心のバリアフリー推進

今後も合理的配慮に努めるが、新庁舎建設に際し十分配慮したい。



まちづくり

問 今後のまちづくりにおいて住民の力は欠かせないものと考えるが、認識を問う。

答 人口減少や超高齢化が進行する中で、ますます地域力が重要になつてくると認識する。

問 生活支援など行つていく中で、住民の力も必要であり、住民が主体的に動ける体制をつくつていいくのも行政の役目だと考えられるが。

問 自助・互助・共助のまちづくり、心のバリアフリーの取り組みの一つが、ヘルプマークだと思うがどうか。

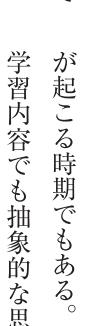
答 まとめる人が必要で、あり、全て肩書きを外すことがいいとは思わないが、いろんな形があつていいと考える。



問 一般住民を交え、肩書き抜きで話し合える場にできないか。

問 箕面市の調査より10歳頃が学力格差の壁になるとあった。認識は。

答 子どもから大人へと変わる過程のなかで、身体的にも精神的にも変化が起る時期もある。学習内容でも抽象的な思考が必要になる。



二、子どもの学力・生活習慣



伊木 真由子

一、まちづくり

答 まとめる人が必要で、あり、全て肩書きを外すことがいいとは思わないが、いろんな形があつていいと考える。



子どもたちが生きる力

問 子どもたちが生きる力を培うためには、確かな学力が必要である。10歳が1つの壁になるならそれまでに対応が必要ではないか。

問 子どもの学力・生活習慣



問 子どもの生活に関する実態調査の結果を踏まえ、今年度の成果を問う。

答 行政の役目だと考えられる。区長会や地区福祉委員会を通して体制づくりをお願いしている。

答 子どもから大人へと変わる過程のなかで、身体的にも精神的にも変化が起る時期もある。学習内容でも抽象的な思考が必要になる。

